

後藤点について

——『嘉永新刻 論語 後藤點 片假名附』を中心に——

石 川 洋 子

一、はじめに

後藤点は江戸時代もっとも普及した訓点である。故に版種も多い。その版種の一つである、『嘉永新刻 論語 後藤點 片假名附』については、これまでよく便宜的に使用したが、その資料の価値については言及しなかった。

また、後藤点については、以前述べたことがあるが、⁽¹⁾それは、後藤点の版種についてと、後藤点と他の訓法（道春点・春台点・一斎点）との比較における後藤点の特徴についてとであった。

そこで、今回の論文は、これまで便宜的に使用してきた版本の『嘉永新刻 論語 後藤點 片假名附』について調査検討する。また、この版本と後藤点の初刻本と思はれる『改正四書集註』⁽²⁾との訓法の相違を具体的に比較調査し、この版本の価値を明かにするとともに、同じ後藤点といふ兩版本内の訓点についても検討するものである。

二、『嘉永新刻論語 後藤點 片假名附』について

『嘉永新刻論語 後藤點 片假名附』（一冊）については、これまで詳細についてはわからなかった。刊記についても、題箋によって嘉永（一八四八）一八五四）年間刊行としてきたのである。

ところで、鈴木直治氏の『中国語と漢文』³に、この後藤点論語について関係があると思はれることが、次のやうに述べられてゐる。

また、石川県立図書館に、「後藤点」の読み方によって、原文に総振り仮名を付けた△四書・後藤点・片假名附▽が、所蔵されている。△孟子▽の部分が欠けており、刊年の詳細はわからないが、題箋に角書きで「嘉永新刻」と標示されており、嘉永年間の刻本にちがいない。

この鈴木氏の言はれる、石川県立図書館蔵の『四書』の中の『論語』は、架蔵の『論語』と同じものではないかと思はれたので調査検討した。その結果は、次の通りである。

石川県立図書館蔵の後藤点『四書』は、李花亭文庫に所蔵されてゐる。その『李花亭文庫目録』には、後藤点『四書』として一つに扱はれてゐるのではなく、次のやうに三つに分けて記載されてゐる。

324

嘉永
新刻 学庸

朱熹章句

△江戸 山城屋政吉 嘉永元△

11、20丁 18 cm 「和」

書名は題箋による。

後藤点 片仮名附 四書

171
—
9

325

論語 卷之上、下

朱熹集註

△江戸 山城屋政吉 嘉永元△

29、32丁 18 cm 「和」

題箋は
嘉永
新刻 論語

後藤点 片仮名附 四書

171
—
10

326

孟子 卷之上、下

朱熹集註

後藤点について

171
—
11

後藤点について

六八

△江戸 山城屋政吉 嘉永元▽

2冊 18 cm 「和」

題箋は 嘉永
新刻 孟子

後藤点 片仮名附 四書

これを調査した結果、次のやうにまとめることが出来ると思ふ。

a、鈴木氏は、『孟子』欠とされてゐるが、『四書』は全部そろつてゐる。したがって、その『孟子』の刊記に抛り、『四書』の刊記がわかる。次の通りである。

「嘉永元年戊申四月

江戸橋四日市 山城屋政吉」

b、石川県立図書館蔵のものは版本の磨滅甚だしいが、架蔵のものと同じ版本である。架蔵のものの後刷本かと思はれる。

c、架蔵のものは『四書』の内の一部であり、これは初刻本かと思はれる。

以上が、今回の調査で明らかになった書誌である。

三、寛政本と嘉永本との比較

後藤点については、内野台嶺氏に次のような指摘がある。

此の後藤点なるものは、明治に至るまで度々翻刻されてゐるが、自分が見たのは寛政四年上梓されたものである。之を明治以後の版本と比べると、勿論多少の相違はあるが、未だ道春點のやうな時代による甚しい相違は見出されぬ。⁽⁴⁾

後藤點と冠する版本間の相違は「多少の相違」であることは今回の調査の大前提とするところである。しかしながら、「多少の相違」とはどこにあるのか。

今回は、次の二種の資料を使用して調査検討する。次の通りである。

- A 『改正四書集註』 寛政六（一七九四）年刊行 東洋大学所蔵（以後、「寛政本」とする。）
- B 『嘉永新刻論語 後藤點 片假名附』 嘉永元（一八四八）年刊行 架蔵（以後、「嘉永本」とする。）

三―一、相違する用例について

寛政本と嘉永本とで、両者が明らかに相違してゐることを指摘できる、返り点・補読語（送り仮名等）・振り仮名について、『論語』全巻を通して具体的に比較してみる。この調査で誤字・脱字と思はれるものもあるがそれについても挙げておく。

以下、『論語』の「序」及び「篇」ごとにその相違する用例をすべて挙げる。列挙の方法は、先づ原文を挙げ、次にその篇の章の番号を括弧内にアラビア数字で示す。この章の番号は後藤点『論語集註』に基く。その下に寛政本と嘉永本との相違を必要と思はれる部分だけ示すこととする。その際、原文で訓点の無い部分は、適宜（ ）に括って補読し、これを片仮名で表記した。

△朱熹集註序説▽ 三箇所。

①「居三歳而反于衛」 補読語「（三歳）ニシテ」、寛政本（3丁表1行目）にはなく、嘉永本（2丁裏1行目）にはある。

②「至河而反」 「至」字を嘉永本（2丁裏3行目）「イタヲテ」。誤字か。

③「但覺意味深長」 補読語「コト」、寛政本には「（意味）ノ（深長）コトヲ」とあり、嘉永本（4丁表8行目）には「イミノシンチャウヲ」とない。寛政本の誤か。

△学而第一▽ 一箇所。

- ④「其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣」(2) 「而」字を、寛政本「而シテ」。嘉永本は不読。

△為政第二▽ 五箇所。

- ⑤「如北辰居其所而衆星共之」(1) 寛政本「北辰ノ」。嘉永本「ノ」なし。

- ⑥「何以別乎」(7) 「乎」字を、嘉永本「ヤ」。寛政本なし。脱字か。

- ⑦「曾是以爲孝乎」(8) 「乎」字を、寛政本「ヤ」。嘉永本「カ」。

- ⑧「攻乎異端」(16) 「攻」字を、寛政本「オサムルハ」。嘉永本「ヲサムルハ」。

- ⑨「孔子對曰」(19) 「曰」字を、寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

△八佾第三▽ 三箇所。

- ⑩「子聞之曰」(15) 寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

- ⑪「管仲之器小哉」(22) 「之」字を、寛政本「カ(ガ)」。嘉永本「ノ」。

- ⑫「吾未嘗不得見也」(24) 「見」字を、寛政本「ミルコト」。嘉永本「マミユルコト」。

△里仁第四▽ 一箇所。

- ⑬ 「人之過也各於其黨」(7) 「黨」字を、寛政本「タクヒニ」。嘉永本「トウニ」。

△公治長第五▽ 三箇所。

- ⑭ 「糞土之牆不可朽也」(9) 「朽」字を、寛政本「朽(ヌ)ル」。嘉永本「ヲス」。

- ⑮ 「三已之無慍色」(18) 「之」字を、寛政本は不読。嘉永本「コレヲ」。

- ⑯ 「曰。未知焉得仁」(18) 「曰」字を、寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

△雍也第六▽ 二箇所。

- ⑰ 「有祝鮀之佞而有宋朝之美」(14) 二つの「之」字を、寛政本「カ(ガ)」。嘉永本「ノ」。ただし、嘉永

本は後者の「之」字に対しては「宋朝之美」^{ソウテウカノヒ}と「カ(ガ)」と「ノ」と付訓してある。これは「カ」を削り忘れたのであらう。

- ⑱ 「人之生也直。罔之生也幸而免」(17) 二つの「也」字を、寛政本は「イケルハ」・「(イケ)ルハ」と不

読。嘉永本「イケルヤ」と「ヤ」と訓ずる。

△述而第七▽ 七箇所。

①9 「加我数年五十以學易可以無大過」(16) 寛政本「^{オヘシメハ}五十^デ以^{フコトヲ}學^ヲ」。^{マナヘハ}嘉永本「^{ツイニモツテ}五十^ヲ以^ヲ學^ヲ」。^{キヲ}「五
十」の字訓と、返り点の付け方に相違がある。

②0 「發憤忘食」(18) 「發」字を、寛政本「ヲコシ」。嘉永本「ハツシ」。

②1 「云爾」(18) 「爾」字を、寛政本「コ云フト」で不読。嘉永本「シカイフ」。

②2 「不射宿」(26) 「射」字を、寛政本「キ(ズ)」。^{マナヘハ}嘉永本「イス(ズ)」。

②3 「難與言」(28) 寛政本「言ヒ」。嘉永本「イハ」。

②4 「我欲仁」(29) 寛政本「欲シテ」。嘉永本「ホツシ」。補読語「テ」。

②5 「丘也幸」(30) 寛政本「幸イ」。嘉永本「サイハヒ」。

△泰伯第八▽ 一箇所。

②6 「卑宮室」(21) 「卑」字を、寛政本「ヒキクシテ」。嘉永本「イヤシクシテ」。

△子罕第九▽ 二箇所。

②7 「君子多乎哉」(6) 寛政本「多ナンヤ」。嘉永本「タナランヤ」。寛政本「ラ」を脱字か。

②8 「子云」(6) 「云」字を、寛政本「云(ノタ)マフ」。嘉永本「イフ」。

△郷黨第十▽ 四箇所。

②9 「屏氣」(4) 「屏」字を、寛政本「オサメテ」。嘉永本「ヲサメテ」。

③0 「君子不以紺纁飾」(6) 「飾」字を、寛政本「モトヲシニ」。嘉永本「モト(ヲ)シニセ」△上記括弧内の(ヲ)は「テ」のやうにも見える▽。寛政本、「セ」を脱字か。

③1 「無所不佩」(6) 「佩」字を、寛政本「オヒ」。嘉永本「ヲビ」。

③2 「食不厭精」(8) 「食」字を、寛政本「イヒハ」。嘉永本「イヽハ」。

△先進第十一▽ 五箇所。

③3 「爲之棹」(7) 「爲」字を、寛政本「ツ克蘭ント」。嘉永本「スクラント」。嘉永本、誤字か。

③4 「誰爲」(9) 寛政本「タメニカセン」。嘉永本「タメニセン」。

③5 「不得視猶子也」(10) 寛政本「(ゴト)クスルコト」。嘉永本「コトクスルコトヲ」。

③6 「鏗爾含瑟」(25) 「舍」字を、寛政本「オイテ」。嘉永本「ヲイテ」。

③7 「曾哲後」(25) 「後」字を、寛政本「オクレタリ」。嘉永本「ヲクレタリ」。

△顔淵第十二▽ なし。

△子路第十三▽ 二箇所。

③⑧ 「言不可以若是其幾也」 (15) 「幾」字を寛政本「アテゝス」。嘉永「キス」。

③⑨ 「器之」 (25) 寛政本「器モノニス」。嘉永本「キニス」。

△憲問第十四▽ 十二箇所。

④⑩ 「可以為仁」 (2) 寛政本「仁トス可シ」。嘉永本「ジンスヘシ」。嘉永本「ト」脱字か。

④⑪ 「曰。彼哉彼哉」 (10) 「曰」字を、寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

④⑫ 「曰。人也」 (10) 「曰」字を、寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

④⑬ 「亦可以為成人矣。」 (13) 「為」字を、寛政本「ス」と訓ずるか。嘉永本は「ナス」。

④⑭ 「桓公九合諸侯」 (17) 「九合」を、寛政本「タ、シ合セテ」。嘉永本「キウガフシテ」。

④⑮ 「管仲之力」 (17) 「之」字を、寛政本「カ(ガ)」。嘉永本「ノ」。

④⑯ 「子聞之曰」 (19) 「曰」字を、寛政本「ノ(タマハク)」。嘉永本「イハク」。

④⑰ 「其言之不忤」 (21) 「之」字を、寛政本は不読。嘉永本「ノ」。

④⑱ 「不敢不告也」 (22) 「告」字を、寛政本「告(マウ)サ」。嘉永本「ツケ」。

④⑲ 「子服景伯以告曰」 (38) 「告」字を、寛政本「マウシテ」。嘉永本「ツケテ」。

⑤⑩ 「是知其不可」 (41) 寛政本「不可ナルコトヲ」。嘉永本「フカナルヲ」。

- ⑤1 「夷俟」（46） 「夷」字を、寛政本「ウツイニシテ」。嘉永本「イニシテ」。

△衛霊公第十五▽ 九箇所。

- ⑤2 「行不篤敬」（5） 寛政本「篤敬アラ不シハ」。嘉永本「篤敬ナラスンハ」。
- ⑤3 「心先利其器」（9） 「利」字を寛政本「トクス」。嘉永本「リトス」。
- ⑤4 「不日如之何如之何者吾未如之何也已矣」（15） 三つの「之」字を、寛政本は不読。嘉永本「コレヲ」。
- ⑤5 「終日」（16） 寛政本「ヒネモソ」。嘉永本「シウジツ」。
- ⑤6 「君子病無能焉」（18） 寛政本「無キコトヲ」。嘉永本「ナキヲ」。
- ⑤7 「衆惡之」（27） 寛政本「惡ムヲモ」。嘉永本「ニクムモ」。
- ⑤8 「衆好之」（27） 寛政本「好スルヲモ」。嘉永本「好スルモ」。
- ⑤9 「終日」（30） 寛政本「（ヒネモ）ソ」。嘉永本「シウジツ」。
- ⑥0 「終夜」（30） 寛政本「ヨモスカラ」。嘉永本「シウヤ」。

△季氏第十六▽ 一箇所。

- ⑥1 「疾夫舍曰欲之而必為之辭」（1） 「舍」字を寛政本「オイテ」。嘉永本「ヲイテ」。

△陽貨第十七▽ 四箇所。

⑥2 「以費畔」 (5) 「以」字、寛政本「キテ」。嘉永本「キケ」。嘉永本、誤字か。

⑥3 「将命者出戸」 (20) 「将」字を寛政本「オコナフ」。嘉永本「ヨコナフ」。

⑥4 「終日」 (22) 寛政本「日ヲ終へ」。嘉永本「シウジツ」。

⑥5 「悪訐以為直者」 (24) 「訐」字を寛政本「アハイテ」。嘉永本「フバイテ」。嘉永本の「フ」は「ア」の誤。

△微子第十八▽ 一箇所。

⑥6 「歌而過孔子」 (5) 寛政本「ウタフテ」。嘉永本「ウタツテ」。

△子張第十九▽ なし。

△堯曰第二十▽ なし。

以上、寛政本と嘉永本との相違する用例、六十六例をすべて挙げた。

三十一、相違する用例の検討

その相違を分類すると、次のようになる。用例数の下の括弧の中に示した番号がその分類に当たる用例の番号である。

イ、補読語

十一例 (1) • (5) • (24) • (30) • (34) • (35) • (50) • (52) • (56) • (57) • (58)

口、助字の字訓

十例 (4) • (7) • (11) • (15) • (17) • (18) • (21) • (45) • (47) • (54)

ハ、虚字の字訓

十三例 (9) • (10) • (12) • (16) • (19) • (26) • (28) • (41) • (42) • (43) • (46) • (48) • (49)

二、音讀・訓讀

十二例
(13) ●
(14) ●
(20) ●
(38) ●
(39) ●
(44) ●
(51) ●
(53) ●
(55) ●
(59) ●
(60) ●
(64)

ホ、仮名遣ひ

十一例 (8) • (22) • (23) • (25) • (29) • (31) • (32) • (36) • (37) • (61) • (63)

へ、音便

一
例
⑥⑥

ト、誤字・脱字

八例
(2)
•
(3)
•
(6)
•
(27)
•
(33)
•
(40)
•
(62)
•
(65)

チ、返り点

一例
(19)

次に、この分類に基づいて、寛政本と嘉永本との相違する用例の意味について考察する。

イ、補読語

補読語「コト」⑤⑥、「ヲ」⑤⑦・⑤⑧、「ノ」⑤、「テ」②④、「カ」③④は、寛政本にあって、嘉永本にはない。

これは補読語に相違のある用例十例のうち七例に当たる。これから考へられることは、寛政本よりも時代の新しい嘉永本の方が補読語が少なくなる傾向にあるといふことである。

その他の四例については次のことが言へる。

用例②は、補読語の違いである。寛政本は動詞「アリ」を使用し、嘉永本は助動詞「ナリ」を使用してゐる。建武本論語や成實堂論語鈔でこの用例を見ると「アリ」が使用されてゐる。「ナリ」の方は新しい訓じ方である。

用例①・③⑤は、補読語が寛政本にはなく、嘉永本にはある例である。文脈上では補読語「ニシテ」、「ヲ」があつてもなくても差し支えない所なので、寛政本の脱字とも考えられるが不明である。

用例③⑥は、補読語「セ」（サ変動詞の未然形）が寛政本にはなく、嘉永本にある例であるが、ここは文脈上、「セ」を付訓しなくても「もとほしにせず」と「セ」を補つて訓ずるところである。

ロ、助字の字訓

助字「之」⑮・④⑦・⑤④、「也」⑮⑧、「爾」②①は、寛政本において不読であるが、嘉永本では付訓されてゐる。不読字であつた助字が時代とともに次第に付訓されるやうになるのは、他の訓法と同様に一般的なことである。

助字「之」⑪・⑰・④⑤は、寛政本においては「カ（ガ）」と訓ぜられ、嘉永本においては「ノ」と訓ぜられてゐる。助字「之」は時代とともにその訓は「ノ」に統一されてくる傾向がある。

「乎」⑦は、寛政本「ヤ」、嘉永本「カ」と付訓されてゐる。

ただし、用例④のみは、「而」を、寛政本は付訓され、嘉永本は不読である。

ハ、虚字の字訓

十四例のうち、敬語に関するものが十例と多い。なかでも「曰」字に対する字訓で寛政本「ノ（タマハク）」、嘉永本「イハク」とされるのは、⑨・⑩・⑬・④①・④②・④⑥の六例もある。また、「云」字に対する字訓で寛政本「云（ノタ）マフ」、嘉永本「イフ」とされるのは、②⑧の二例である。「告」字に対する字訓で寛政本「告（マウ）サスンハ」・「マウシテ」、嘉永本「ツゲスンハ」・「ツゲテ」とされるのは④⑧・④⑨の二例である。「見」字に対する字訓で寛政本「ミル」、嘉永本「マミユ」とされるのは⑫の一例である。

ところで、『論語』の中の「曰」字について、主語が孔子の場合、つまり孔子が述べてゐる場合に「曰」字が使用される場合、寛政本では、おそらく「ノタマハク」と訓じてゐるであらうと以前述べたことがある。^⑦この用例の六例も孔子が主語の場合である。が、これを嘉永本では「イハク」と訓ぜられてゐる。しかし、孔子が主語となる他の大多數の「曰」字は嘉永本でも「ノタマハク」と訓ぜられてゐるのが一般である。

用例⑱は古来解釈の分かれるところで有名である。しかしながら寛政本も嘉永本も解釈は同じと見てよいと思ふ。

ただし、「五十」に対する付訓を嘉永本は寛政本と変へてゐるために、返り点の打ち方も変化してゐる。

用例②⑥は「卑」字を、寛政本「ヒキクシテ」、嘉永本「イヤシクシテ」と付訓してゐる。建武本論語も、成簣堂論語鈔も、ここは「いやし」と訓じてゐるところである。初め独自の訓法を付訓したけれども、後に人口に膾炙してゐる訓に変へたのであらうか。

用例④③は「為」字を、寛政本「ス」と付訓するとしたが、これは「(ナ)ス」と訓ずる可能性もあり、明かでない。ただし、嘉永本の「為」字については、調査したことがある。⁽⁸⁾『論語』には全部で「為」字が一七二例有り、嘉永本はその中で九二例を「ス」、一五例を「ナス」と付訓してをり、「為」字を「ス」と訓ずることが多いといふことは明かである。

二、音読・訓読

十二例の用例すべて、寛政本は訓読みされてをり、嘉永本は音読みされてゐる。時代とともに訓読みから音読みへ変化したのであらう。

ホ、仮名遣ひ

語頭に「オ・ヲ」の現はれる用例⑧・②⑨・③①・③⑥・③⑦・⑥①・⑥③を見ると、歴史的仮名遣ひに関係なく、寛政本はア行の「オ」で付訓されてをり、嘉永本はワ行の「ヲ」で付訓されてゐる。

他の仮名遣ひの用例②・③・⑤・③②も、前述した通りであり、両版本ともに歴史的仮名遣ひに關係なくそれぞれに付訓されてゐる。ただし、同版本内での仮名遣ひは統一されてゐるやうである。

へ、音便

音便は両版本とも使用されてゐるが、相違してゐたのは、用例⑥の「ウタフテ」・「ウタツテ」の一例であつた。

ト、誤字・脱字

誤字・脱字については、用例②・③・⑥・②⑦・③③・④④・⑥②・⑥⑤に示した通りである。

チ、返り点

用例④は、ハの項で説明した。

四、終はりに

以上、後藤点嘉永本についてと、後藤点についてとを、寛政本と嘉永本とを比較検討することにより考察した。架蔵の嘉永本は、石川県立図書館蔵の『孟子』の刊記により、「嘉永元年戊申四月」といふことが明らかになつ

た。また、これは『四書』の内の一部であり、嘉永元年の版本の初刻本かと思はれる。

寛政本と嘉永本の相違箇所は六十六箇所あった。これだけ見るとこの両者は同じ後藤点でもまったく違ふ訓点に変化してゐるやうに思へるが、実は、『論語』全体から見た、この相違箇所はごく一部であり、後藤点の基本的な姿には影響はないと言へる。しかしながら、後藤点も時代とともに、補読語が少なくなり、不読であつた助字が訓ぜられるやうになり、「が」から「の」に字訓が変へられたり、訓読みされてゐた語が音読みされたりと、時代に合つた新しい訓が付訓されるやうになり、変化してゐることが明らかになった。

後藤点間の著しい相違はないといふ観点からは、嘉永本を後藤点の資料として使用する価値は大いにあるといへる。ただし、今回調査したやうな相違も厳然と存在するので、嘉永本を使用するときは細心の注意が必要である。

注

- 1 石川 洋子 ハ『四書』の「後藤点」について『実践国文学』第三十四号 昭和六十三年十月。
- 2 注1拙論による。
- 3 一五九頁（『中国語研究叢書12』所収） 昭和五十年九月 光生館。
- 4 「論語を中心として観たる訓点の変遷」（『松井博士古稀記念論文集』所収）昭和六年十二月 二二七頁。
- 5 大東急記念文庫蔵『論語集解』複製本。
- 6 『成實堂蔵本論語抄』複製本。
- 7 石川 洋子 ハ「いはく」と「たまはく」——「子曰」の訓じ方——『同朋大学論叢』第六十四・六十五合併号 平成三年六月。

8 石川 洋子 「為」字の訓読について——「ス」から「ナス」へ——『同朋大学論叢』第六十九号 平成六年十二月。